

小学校外国語におけるオンライン会議システムを活用した 異文化交流に対する意欲を促進させる実践 ～留学生に自分の考えや気持ちを伝える言語活動に着目して～

岡朋哉*1, 渡辺楓*2, 阪東哲也*3, 長野仁志*1, 石坂広樹*4

グローバル化が急速に進展しており、外国語によるコミュニケーション力の育成に加え、国際協調の精神を養うことが求められている。これらの達成に向けては、外国語によるコミュニケーションを図る必然性を感じられる言語活動に取り組むことが重要である。小学6年生を対象とし、オンライン会議システムを用い、自分と異なる文化的背景を持つ留学生とコミュニケーションする言語活動を設け、その教育的効果を検討した。共起ネットワーク分析の結果、学習者は既存の知識・技能を用いながら意欲的にコミュニケーションを図るとともに、異文化に対する興味・関心を抱く等、異文化理解に対する素地を育成できたと考える。

〔キーワード〕：小学校、英語、オンライン会議システム、異文化交流

1. はじめに

グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション力は、一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要不可欠である。我が国における外国語によるコミュニケーション力を育成する教育は、小学校では外国語活動として導入されてきた。教育再生実行会議の第三次提言では「初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育を充実する」として、小学校の英語学習の抜本的拡充が盛り込まれ[1]、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実が図られるようになった[2]。そして、中央教育審議会での検討を経て、平成29年告示の小学校学習指導要領(新小学校学習指導要領)に小学校外国語活動・外国語科が導入されることになった[3]。初等中等教育段階からの外国語活動・外国語科によるコミュニケーション力の育成に高い関心が寄せられている。

新小学校学習指導要領外国語活動・外国語科編ではそれぞれの教科の目標として、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地や基礎となる資質・能力を育成することが示されている。

さらに、小学校段階においては、コミュニケーションを図るだけでなく、異文化交流についても言及されている。段階的に異文化と触れる機会を設けることで、我が国の文化の良さに気付くとともに、異文化に対して理解しようとする態度の育成が期待できる。異文化交流に関する資質・能力の具体に関しては、小学校学習指導要領に以下のように示されている。

- (イ) 我が国の文化や、英語の背景にある文化に対する関心を高め、理解を深めようとする態度を養うことに役立つこと
- (ウ) 広い視野から国際理解を深め、国際社会と向き合うことが求められている我が国の一員としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うことに役立つことという態度を養うこと

このような異文化交流に関する資質・能力を育成するためにも、小学校外国語活動・外国語科における外国語(特に英語)による聞くこと、話すことに関する学習活動の充実が喫緊の課題である。

本研究では新小学校学習指導要領で学習の基盤と位置付けられた「言語活動」に注目した。文部科学省は、言語活動と体験活動との関係について「実社会の中で様々な事象に触れたり、多様な他者との交流の機会を持ったりすることも重要」と示している[4]。この点を踏まえ、小学校外国語活動・外国語科における言語活動では学習者が外国語を使う必然性を感じられる言語活動を単元の中で効果的に位置付けることで、現在社会で求められている外国語のコミュニケーション能力を育むことができると

*1 鳴門教育大学 附属小学校

*2 鳴門教育大学大学院 学校教育研究科 教科領域教育専攻 国際教育コース

*3 鳴門教育大学 情報基盤センター

*4 鳴門教育大学大学院 学校教育研究科 人間教育専攻(グローバル教育コース)

考えられる。

2. 言語活動の設計

これまでの小学校英語教育においては中学校との接続を考慮した実践が行われていた。例えば、各単元に配置された構文・フレーズをパターン・プラクティス方式で学んでいく活動が報告されている[5]。また、「あらかじめ授業内容がすべて定められ、学習者はこれに従って学習していく形の指導方法」として知られているプログラミング型カリキュラムによる実践が報告されている[6]。パターン・プラクティス方式やプログラミング型カリキュラムは焦点化される内容が明確であるため、学習者の自信が向上することが示されている。しかし、取り組むコミュニケーションがパターン化されているため、外国語を用いたコミュニケーションをしているという実感が持てず、実社会での文脈を感じられにくいことが考えられる。そのため、学習者の知識・技能は一定程度身につくものの、思考力・判断力・表現力の育成につなげることは難しいと考えられる。

学習が外国語を用いたコミュニケーションをしているという必然性を持たせるためには、日本語以外の言語を母語とする方々と実際の交流をもつことが考えられる。日本にいながら、外国語でのコミュニケーションできる体験として留学生を対象とした実践が報告されている。田中らは留学生との交流会を設定し、音声言語以外の表情やジェスチャー、知っている英語の言い換え等、何とかして相手に伝えようとした結果、相手に自分の思いが伝わったときにコミュニケーションの楽しさを実感し、その積み重ねによってコミュニケーションへの態度が育まれていくと主張している[7]。このことから、学習者が「(自分で)伝えたいという思い」を喚起させられる言語活動を設定する必要があるといえる。

例年、本校でも留学生と外国語でコミュニケーションの機会を設けているが、現在新型コロナウイルス感染症防止の観点から、直接的な交流の場を設けることは困難な状況である。このような直接的な交流の場を設けることが難しい状況においても、学習者が取り組んでみたいと思える言語活動を実現するためにオンライン会議システムが活用できると考えた。これまでも、本校では日本の学校を対象としてではあるが、オンライン会議を用いた実践に取り組んでおり、直接的な交流の場ではなかったが、学習者らがコミュニケーションを図ることの必然性を感じながら交流する体験をしている[8]。

そこで、本研究では、オンライン会議システムを活用して、外国語におけるコミュニケーションを図

る必然性を感じられる言語活動に着目し、留学生に自分の考えや気持ちを伝える実践に取り組むこととした。

3. 目的

小学校外国語科における外国語によるコミュニケーションを取り入れた学習活動の充実に向け、オンライン会議システムを活用した留学生との交流の効果検証を行う。

4. 方法

4.1 実践対象者と実践時期

本実践対象は、四国圏のA小学校6年生98名である。実践期間は、2020年6月から2020年8月である。

4.2 実践環境と場の設定

本校ではMicrosoft365の包括的な契約を行っており、小学校と留学生が同じ組織構成員であることから、留学生との交流はTeamsを用いることとした。本実践に参加した留学生の人数構成はエルサルバドル、フィリピン、フィジー、ホンジュラス、マリ、セネガル、ジャマイカ、中国の各1名ずつ計8名である。なお、コミュニケーションに用いる言語は英語とした。

4.3 本実践の概要

本単元は二つの単元が組み合わさった大単元として計画した。表1に単元計画を示す。学習者が自分の気持ちや考えを伝えたいと思う気持ちを高め、さらに学習した知識を留学生とのコミュニケーションに活かせることをねらいとした。

まず、第1次「自己紹介をしよう」では、留学生

表1 単元計画

次	時	◆目標
1	1h	◆自己紹介をしよう①
	2h 本時	◆自己紹介をしよう②
2	3h	◆季節や行事の言い方を知ろう。
	4h	◆各地の行事でできることの言い方を知ろう。
	5h	◆季節の行事の言い方をマスターしよう。
	6h	◆身近な建物の言い方を知ろう。
	7h	◆各地でできることを伝える言い方を知ろう。
3	8h	◆建物や各地でできることについて書いてみよう。
	9h	◆徳島について、英語での言い方を調べよう。
	10h	◆徳島紹介シートを作ろう。
	11h	◆徳島の魅力を伝えるための工夫をしよう。
	12h	◆徳島の魅力を伝えよう。
	13h	◆留学生からのフィードバック

に対して、「where are you from?」, 「I' m from ~」, 「I' m good at ~」等の英語の表現を用いて、自己紹介をする学習活動を設定した。第一時では留学生が作成したショート動画を視聴し、次は自分たちが留学生に対し、自己紹介をするという学習に取り組むことをつかませた。自己紹介の際にはオンライン会議システムを活用し、留学生に対して学習した表現を用いて自己紹介を行うように計画した。オンライン会議システムを活用することで、外国の人に自分のことについて直接伝える状況、つまり英語を用いる必然性が生まれるため、学習者自身が相手に伝わるように、思考を働かせながら自己紹介をすることができる考えた。

そして、第2次「徳島県の魅力を伝えよう」では、自己紹介をした留学生に向けて、「In spring [summer/fall/winter], welcome to (地名), You can enjoy[see/eat], We have/don' t have 等」という表現を活用して、「徳島に今年来た留学生に徳島の良いところについて紹介する」という言語活動の場

を設定した。ここでも、同様にオンライン会議システムを活用することで、留学生と学習者を結びつけられるようにした。

4.4 本時の流れ

表2に本時の流れを示す。本時では、指導者は「簡単な語彙や表現を用いて留学生に対して、自己紹介をすることができる」ことを目標とした。

学習者は、「留学生に対して自己紹介しよう」という活動目標をもって学習を進める。学習を進める過程で、留学生に対して、自分の考えや気持ちが伝わるように言語的要素や非言語的要素を活用しながら、自分のことについて伝えられると考えた。

このような学習者の姿の実現に向けて、外国語科における支援として、限られた表現の中で自己紹介ができるように、事前に教師がモデルを示したり、自己紹介をする際に、どのような表現活用するかを全体で確認したりすることで、活動に見通しをもつことができるようにした。そして、オンライン会議

表2 本時の流れ

時間	HRT	JTE/ALT	支援
○Warm-up (5分) ・あいさつ ・Small Talk <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> Today' s aim : 留学生に自己紹介してみよう！ </div>	○英語の授業開始のあいさつを行う ○日付・曜日・天気など	○日付や曜日について適宜リピートしていく。(発音練習)	○正しい発音が出るように繰り返し行う。
○Activity 1 (30分) ・留学生と teams を通じてのコミュニケーション活動	○学習者を複数の教室に分けて配置する。 ○留学生とのコミュニケーション活動。1クラスに2グループ配置し、終わったら次の留学生とビデオ通話を行う。	○留学生との活動がスムーズに行うことができるかを観察し、適宜指導を行う。	○各教室に1名教員を配置する。
<div style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> 留学生 : Hello. I' m _____. 学習者 : Hello. 留学生 : Please introduce yourself. 学習者 : ワークシートを見せながら、自己紹介を行う。 留学生 : Nice to meet you. I have one question. 質問をする。 学習者 : 質問に答える。 留学生 : OK. Thanks. Good bye. </div>			
○Closing (10分) 本時の活動を振り返り、気づいたことなどをワークシートに記入する。	○振り返りを記入させる ○感想の共有 ○終わりのあいさつ	○終わりのあいさつを一緒に行う。	

システムによる音声をはっきりと聞こえるように、複数の教室を準備した。

5. 結果

5.1 学習活動の様子

図1に学習活動の様子を示す。学習者は3,4人グループで学習活動に取り組んだ。自分のことを伝えようと、既習の知識・技能を用いながら自己紹介をする姿が見られた。また、グループで自己紹介を行ったことにより、他の学習者の自己紹介の姿から自分の自己紹介に方法について再考し、もう一度自己紹介をする等、自分の学びを調整する姿が見られた。

5.2 学習のふりかえり

(1)形態素解析

オンライン会議システムを活用し、留学生と実際に交流できる場面を設けたことの効果を検証するために、学習者の振り返りに対して計量的分析を行った。分析前の処理として、同じ意味を持つと考えられる語句の置換を行なった。具体的には、「接続」と「つなぐ」は「リモート」、人名は「友達」、「留学生の方」と「外国の方」は「留学生」にそれぞれ置換した。得られた学習者の振り返りに対して、KH Coder[9]を用いて、形態素解析を行った。

形態素解析の結果、本学習に対する学習者の振り返りからの抽出語は、総計3663語であった。表3に、出現回数10以上の抽出語に関して出現回数を頻出順に示す。

最も出現回数が多い抽出語は、「話す」が65であり、続いて、「思う」が44、「伝わる」が36、「留学生」が30、「紹介」が28、「楽しい」が27、「自己」が26、「英語」が24、「声」が22、「質問」が21、「話せる」が20、「相手」が17、「言う」が15、「ジェスチャー」が14、「今日」と「少し」が13、

表3 出現回数10以上の語句（頻度順）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
話す	65	相手	17
思う	44	言う	15
伝わる	36	ジェスチャー	14
留学生	30	今日	13
紹介	28	少し	13
楽しい	27	リモート	11
自己	26	好き	11
英語	24	次	11
声	22	自分	11
質問	21	嬉しい	10
話せる	20	伝える	10

「リモート」と「好き」と「次」と「自分が」11、「嬉しい」と「伝える」が10であった。

(2)学習者の振り返りから見える構造

抽出語間の関連性を探索するために、表3に示した抽出語間の関連を分析するために、共起ネットワーク分析を行なった。図2に得られた共起ネットワーク図を示す。共起ネットワーク図は関連の強いほど、抽出語間では線が太くなり、出現頻度が高い、抽出語の縁が大きくなるように設定している。

各抽出語同士の結びつきに関して、俯瞰して捉える。図2中央部から右部にかけて布置している語句は「話す」-「伝わる」-「思う」等が含まれていることから、このカテゴリは「コミュニケーションの方法」と捉えられる。図2左部に布置している語句は「友達」-「教える」が含まれていることから、このカテゴリは「対話的な学び」を表すと考えられる。また、図2左上部に布置している語句には、「難しい」-「少し」-「自分」-「今日」が含まれていることから、このカテゴリは「学びの課題」と捉えられ



図1 本時の学習活動の様子

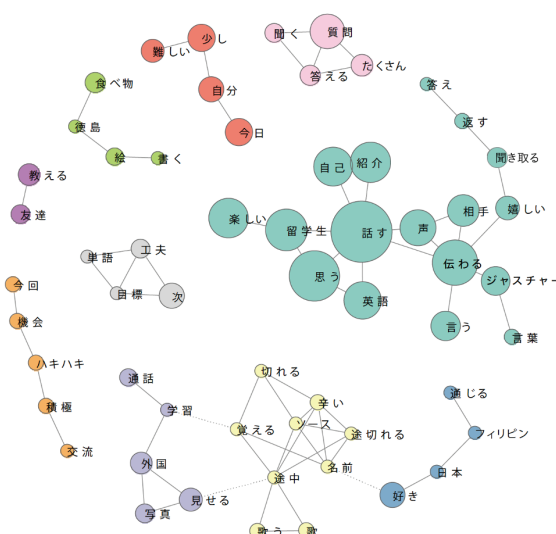


図2 共起ネットワーク図

る。そして、図 2 左下部に布置している語句には、「機会」-「ハキハキ」-「積極」-「交流」が含まれていることから、「学びの成果」と捉えられる。さらに、図 2 中央部から左部にかけて布置している語句である「単語」-「工夫」-「目標」-「次」が含まれていることから、「次時への目標」に関するまとめであると捉えられる。最後に、図 2 の左下部から右下部にかけて布置している語句には「日本」-「好き」, 「外国」-「写真」, 「歌」-「歌う」等が含まれていることから、「異文化理解」に関するまとめと捉えることができる。

これらの結果から、大別して①コミュニケーションの方法, ②対話的な学び, ③学びの成果と課題, ④次時への目標, ⑤異文化理解という 5 つのカテゴリが抽出できる。

6. 考察

オンライン会議システムを用いた異文化交流の機会を設けた本試行的実践は、現代社会で求められている外国語によるコミュニケーション力の育成につながったと考えられる。本研究を通して導出された小学校外国語科と異文化交流に対する成果と課題を述べる。

6.1 小学校外国語科としての成果と課題

言語活動を効果的に単元の中に位置付けるとともに、オンライン会議システムを活用し、日本語以外を母語とする留学生と交流する場面を設けた。共起ネットワーク分析の結果からは、学習者に思いを伝えたいけれども、伝えることができなかった経験をさせることで、外国語を用いたコミュニケーションをしたいという意識を高められることが示された。

学習者は自分が伝えたい内容を自分で選択し、話すことができる場面(言語活動)があったため、既存の知識・技能を生かしながらどうにかして伝えようとする姿が見られた。この「どうにかして」という部分こそがまさに思考力が働いている部分であると考える。相手に伝えたい内容があることは、相手とコミュニケーションを図りたいという気持ちを高めることにつながったと考えられる。

外国語によるコミュニケーション場面では、予めパターン・プラクティスを行い、全員が話すことができるようになった状態で実施する単元設計も考えられる。しかし、得られた結果を踏まえれば、パターン・プラクティスを通して外国語によるコミュニケーションを図ることは学習としての外国語を運用する自信につながられるが、学習者自身の相手に伝えたい思いや気持ちを高める効果は十分ではない

可能性が示唆される。

一方、本研究を通して導出された課題としては、自己紹介の単元において、留学生との交流を図る場面を設けた。しかし、留学生との自己紹介のみに留まり、継続した交流までには十分つなげることができなかつた。そのため、「どうして自己紹介をしなければならぬのか」という疑問を抱く学習者も少なからずいた。

今後、留学生との異文化交流を中心に置いた単元を構成する際には、まず「どうして自己紹介をしなければならぬのか」を明確にする必要があると考えられる。例えば、「徳島県に初めてきた留学生に徳島の良さを伝えよう」という大きな課題を設定することで、学習者たちの中に自己紹介をする必然性が生まれる。このようにゴールから逆算して単元を組み立てるバックワード・デザイン[10]で単元設計することで、学習者が外国語によるコミュニケーションを図ることの必然性を感じさせることができると考えられる。

6.2 異文化交流に対する成果と課題

共起ネットワーク分析の結果から、学習者たちは日本の文化に対して考えたり、外国の文化に関して興味・関心を抱いたりしていることが示唆された。このことから、本研究では、「(イ)我が国の文化や、英語の背景にある文化に対する関心を高め、理解を深めようとする態度を養うことに役立つこと」の素地を培うことができたと考えられる。異文化理解を図ろうとする態度を養うためには、まずその文化に触れる機会がなければならないだろう。本試行的実践中の学習者の様子からは、住んでいる地域と相手の文化に関して、自分の国と似ているところや異なるところについて考え、理解しようという姿が見られた。このような学習場面を体系的に設けることにより、異文化交流に対する意識や異文化理解についての素地を養うことから、異文化に対する理解を深めようとする態度の育成へと繋がると思われる。

本試行的実践で活用したオンライン会議システムによるコミュニケーションの学習活動には課題がある。学習者と留学生は直接会わない状況であったが、意欲的に外国語科の授業に取り組んでおり、学習者一人一人が、やってみたいという気持ちを持って、目的・場面・状況を明確に意識し、コミュニケーションを図っていた。一方で、学習者の振り返りからはオンライン会議システムを活用したコミュニケーションでは、コミュニケーションを図る上で重要な非言語的情報が伝わりにくいと感ずる可能性が示唆された。このことは対面の交流であれば、相手

の反応をみながらコミュニケーションを図ることができる。そのため、自分の考えや気持ちがあまく伝わっていない時に簡単な言葉に言い換えたり、ジェスチャーを活用したりしてどうにかして思いを伝えようとする。しかし、オンライン会議システムを活用した場合、若干ではあるが、相手の表情やジェスチャー等を読み取りにくくなるため、非言語的情報を用いたコミュニケーションが十分に機能しない可能性が示唆された。小学校学習指導要領に示されているように、小学校外国語活動・外国語科の目標はコミュニケーションの素地や基礎を育成することが求められている。外国語による語彙や表現といった言語的情報だけでなく、非言語的情報を用いたコミュニケーションも大切にすることが必要がある。指導者はこれらの課題を意識した上で、オンライン会議システムを活用したコミュニケーションの場面を計画する必要性が指摘できる。

7. まとめ

以上、オンライン会議システムを用いた小学校外国語科における異文化交流に対する意識を促進させる試行的な実践を行い、その教育的効果を検証した。分析の結果、本実践デザインの制約の下で、下記のことことが明らかとなった。

- 1) オンライン会議システムを用い、自分と異なる文化的背景を持つ留学生と交流することにより、異文化交流に対する意欲が向上すること
- 2) 学習者の伝えたい思いを高める言語活動を設けることにより、学習者が外国語によるコミュニケーションを図りたいという意識が向上すること
- 3) 実際の異文化に触れることで、自国の文化理解や異文化理解に関する素地が養われること

これらの結果から、オンライン会議システムを用いることで、相手意識が高まり、伝えたい思いを持ってコミュニケーションを図ることにつながるため、小学校外国語科におけるコミュニケーション能力の素地や基礎、異文化交流に対する素地を培うことの効果が示唆された。一方で、本結果からは素地を培うことができたと考えられるものの、オンライン会議システムを用いる場合、非言語的情報を活用したコミュニケーションが十分に行えない可能性が示唆された。

今後は、小学3年生からオンライン会議システムを用いたコミュニケーションの場面を外国語活動から適宜設け、外国語によるコミュニケーション力を育むと共に、段階的に異文化理解に関する態度を育

成していきたい。

謝辞

本研究に対して、ご示唆をいただきました鳴門教育大学情報基盤センターの曾根直人准教授及び研究協力をいただいた留学生にお礼を申し上げます。また、本研究の趣旨を理解し快く協力していただいた鳴門教育大学附属小学校 ALT Rufus Houghton Ward 先生に心から感謝します。

参考文献

- [1] 教育再生実行会議(2013) これからの大学教育等の在り方について(第三次提言), https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaiei/pdf/dai3_1.pdf(最終アクセス日:2020年12月30日)
- [2] 文部科学省(2013) グローバル化に対応した英語教育改革実施計画, https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf(最終アクセス日:2020年12月30日)
- [3] 文部科学省(2018) 小学校学習指導要領(平成29年3月告示), 東洋館出版社
- [4] 文部科学省(2016) 資料5 言語能力について(整理メモ), https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/056/siryo/attach/1366049.htm(最終アクセス日:2020年12月30日)
- [5] 北山長貴(2015) 「小学校外国語活動」の語彙と表現について:『Hi, friends! 1, 2』の分析から, 山形県立米沢女子短期大学紀要, 51, 5-27
- [6] 東野裕子・高島英幸(2007) 小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価, 高陵社書店
- [7] 田中彰一・眞崎新・横山千晴(2013) 小学校外国語活動と中学校英語科の接続(1)-現状と課題, 佐賀大学教育実践研究, 29, 25-40
- [8] 安田哲也・木下光二・坂田大輔・長野仁志・阿部利幸(2004) 小学校におけるITを活用した学習指導についての実践事例報告:コンピュータを活用する力の育成, 鳴門教育大学情報教育ジャーナル, 1, 77-86
- [9] 樋口耕一(2020) 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して— 第2版, ナカニシヤ出版
- [10] 文部科学省(2017) 小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック, 旺文社